

平成21年6月12日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18592434

研究課題名（和文） 認知症看護における看護実践能力修得までのプロセスと構造

研究課題名（英文） The Process of development of skills in Dementia nursing

研究代表者

谷口 好美（TANIGUCHI YOSHIMI）

公立大学法人福井県立大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号 50280988

研究成果の概要：医療施設に勤務する看護師の体験から、認知症看護における看護実践能力を修得するまでのプロセスを明らかにすることを目的とした。「認知症高齢者ケアの場での経験不足」、「受け入れられない期間」を経て、「許容量の広がり」、「慣れの成果」を獲得するプロセスがあることが示された。「受け入れられない期間」を乗り越えるためには「師長・同僚からのサポート」、「場数を踏む」が必要であることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,100,000	0	2,100,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	390,000	3,790,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：看護学、医療・福祉、認知症

1. 研究開始当初の背景

認知症は確定診断が行われていない場合が多く、医療施設に入院中に徘徊などの特異な行動から看護師が徴候を発見することも少なくない。

医療施設における認知症看護に特有な看護実践能力を修得するまでのプロセスを明らかにすることにより、看護教育プログラムや医療施設の看護環境の改善のための基礎

資料を得ることができ、認知症看護の質の向上に貢献すると考える。

2. 研究の目的

医療施設の看護師が認知症高齢者を看護するうえでどのように認知症を理解し、対応できるようになるのかプロセスを記述し、構造を明らかにすることを目的に実施した。

3. 研究の方法

1) 対象

関東・北陸の一般病院・介護老人保健施設・療養型医療施設に勤務する看護師（6施設 37名）のインタビューの逐語録をデータとした（2002年～2008年3月現在）。

2) データ収集・分析方法：

本研究のデザインは質的記述的研究であり、グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて行った（Strauss & Corbin, 1998）。

データ収集は、対象者に30分～1時間程度の半構成的インタビューを行い、医療施設に勤務する中で認知症高齢者に看護を行ううえで困難を感じた体験を想起してもらい、そうした体験を通して考えたこと・思いを補足の質問を行いながら聴取した。

データ分析は、インタビューの逐語録を作成のうえ、対象者が医療施設で認知症看護を行う中で学んだこと、成長したと感じたことを抽出し、体験の意味を検討のうえ命名、カテゴリー化を行った。継続的比較分析によりカテゴリー間の関連性を検討し、看護実践能力のプロセスを記述し、構造図を描いた。

データ分析を行う際、解釈の偏りを避けるために、老年看護学の専門家にスーパーバイズを受け、結果は対象者に確認し、研究者グループで定期的に検討した。

研究の倫理的配慮として、調査の許可が得られた医療施設の看護部で紹介を受けた看護師に事前に研究の趣旨・方法・倫理的配慮を明記した文書を使用し、口頭で説明のうえ、同意書を交わした。また、病院及び所属の大学の研究倫理委員会で検討・承認を得たうえで実施した。

4. 研究成果

医療施設での看護師の共通体験として、先

行研究から【目が離せない人に対する許容】を抽出している。【目が離せない人に対する許容】のサブ・カテゴリーは「責める気持ち」「嫌なことをしたのではないかという内省」「目が離せない人への慣れ」「認知症がそうさせている」となっていた。

中でもサブ・カテゴリー「目が離せない人に対する慣れ」は、認知症看護における看護実践能力を修得するまでのプロセスとして示されている可能性があるため、抽出したサブ・カテゴリーとその関連性を検討した。

主要なカテゴリーは【】、サブ・カテゴリーは抽象度の高い順に「」[]、データからの引用は『』で示し、（）内に施設の種類の記載をした。

1) 認知症看護における看護実践能力を修得するまでのプロセス

【目が離せない人に対する許容】のサブ・カテゴリーである「目が離せない人に対する慣れ」を構成するものとして、[認知症高齢者ケアの場合での経験不足][受け入れられない期間]を経て、[場数を踏む]ことによって、看護師の[許容量の広がり][慣れの成果]を獲得する状況があることが示された（図1）。ここでは、看護者が「目が離せない」状況からくる混乱や緊張感を克服するために、慣れていく（習熟する）過程として[許容量の広がり]を獲得するプロセスを抽出している。

[認知症高齢者ケアの場合での経験不足][受け入れられない期間]では、例として『すごく忍耐が要ります。その方に特に慣れるためには、（中略）うまくいかない自分がやったことが全然受け入れてもらえなかった（療養型・スタッフ）』という状況が語られていた。

[許容量の広がり][慣れの成果]では、

例として『認知症病棟はここへ来て初めてだったのですが、そのときは、(患者が)何をされているかわからないですよ。何でこんなことするの?というのはいったんです。今はもう忘れてしまったくらいですが(中略)仕事を積み重ねていく中でだんだんこうそういう違和感みたいなものがなくなって、自分にはこういう職場があるのかもしれないと最近はずごく思ってきている(療養型・スタッフ)』という変化として示されていた。

その一方で、[怖い慣れ]として語られる場合も示された。『仕事やりやすいつて、こちらサイドのやり方に慣れていっちゃうんですよ。そうすると、それがおかしいとか、変だとかいうことではなくて(中略)その現場に入っちゃうと。それはすごく怖いように思いましたね。(療養型・管理職)』。

2) 「目が離せない人に対する慣れ」を促進する条件

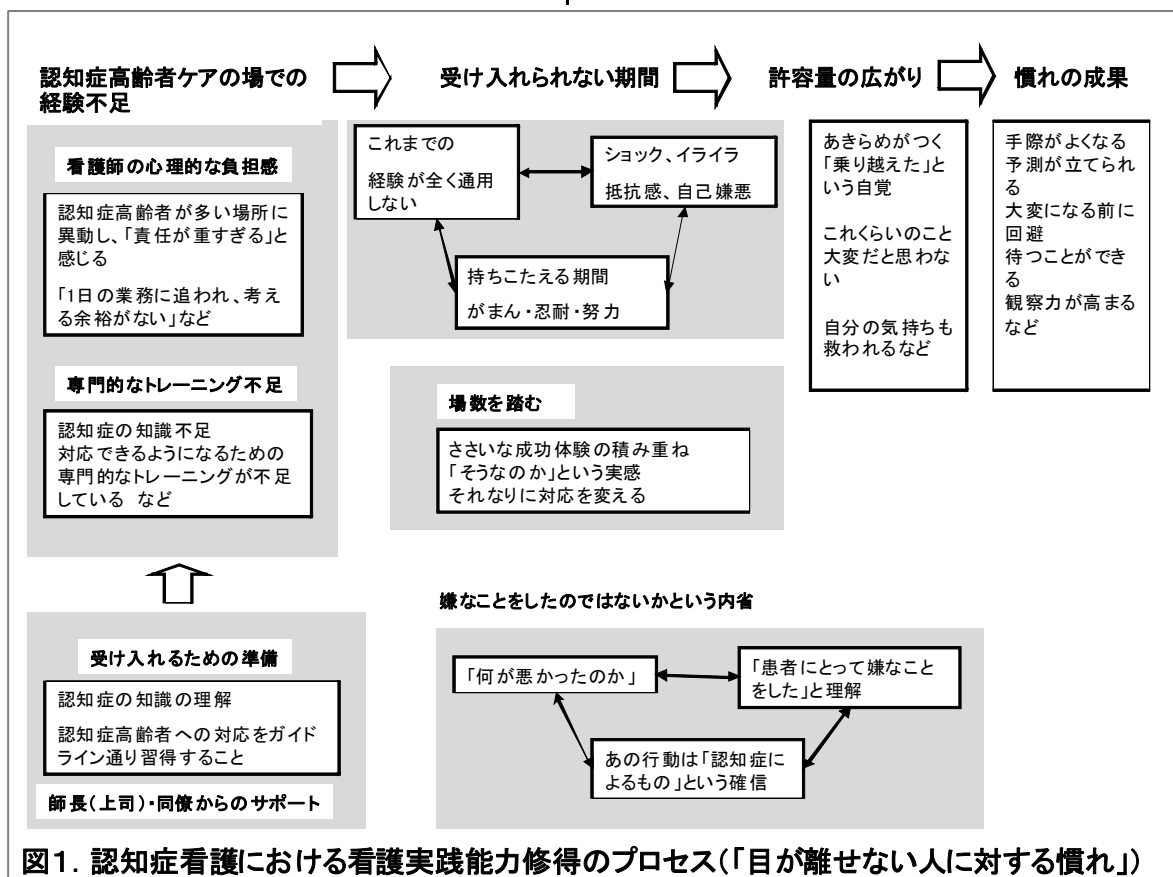
看護師の「目が離せない人に対する慣れ」を促進する条件として、[受け入れるための準備][師長・同僚からのサポート]を抽出した。

『他の看護・介護の方の接し方を見ていると、ああやっぱりそうなんだとか、こんな風にすればいいのかなとか(老健・スタッフ)』『・・・スタッフに伝えました。あの時私はこんなことを思っていたけど、できないのよね、患者様にそれを私たちがイライラしたってしょうがないよって。自分でやれる人はやりますよね、でもそれが着衣失行なのよって。(療養型・管理職)』

また、「目が離せない人への慣れ」によって、高齢者に対して「嫌なことをしたのではないかという内省」が促されていたことが示唆された。

3) 研究成果の活用と今後の課題

カテゴリ【目が離せない人の許容】のプロセス、サブ・カテゴリ「目が離せない人



への慣れ」は今後さらに検討し、洗練することが必要である。それによって、認知症看護の状況を理解するための手段等、初心者への教育プログラムに活用できると考える。

また、本研究の成果を認知症高齢者の看護のための教育プログラムに活用するための手段として、パンフレット「認知症高齢者の看護をサポートするために」を作成した。看護学生、看護師、認知症に関心のある人に配布し、情報提供を行っている。

引用文献

Strauss, A., & Corbin, J. (1998). Basics of qualitative research (2nd ed.): Techniques and procedures for developing Grounded theory, London: Sage Publications. 操華子、森岡崇訳 (2004)、質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順、医学書院。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ①谷口好美 (2006)、医療施設で認知症高齢者に看護を行ううえで生じる看護師の困難の構造、老年看護学、11(1)、12-20、査読有

[学会発表] (計 1 件)

- ①谷口好美 (2008) 認知症看護における看護実践能力修得までのプロセス、日本老年看護学会第 13 回学術集会、2008 年 11 月 9 日、金沢市

[図書] (計 4 件)

- ①谷口好美 (2007) 認知症高齢者と家族の看護、高齢者虐待と看護、高齢者看護学 (小

玉敏江、亀井智子編)、中央法規出版、354-375.

- ②谷口好美 (2007) 認知症徴候の早期発見と予防—認知症予防と看護の課題—、福井県立大学県民双書IV「予防」のすすめ (福井県立大学健康長寿研究推進機構編)、63-93.

- ③谷口好美 (2008) 認知症高齢者に対するコミュニケーション技術、根拠がわかる老年看護技術 (泉キヨ子、天津栄子編)、メヂカルフレンド社、248-262、299-321.

- ④谷口好美 (2009) 認知症高齢者の看護をサポートするために、(福井県立大学看護福祉学部老年看護学教室編、パンフレット A5 判・16 ページ).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 好美 (TANIGUCHI YOSHIMI)
公立大学法人福井県立大学・
看護福祉学部・准教授
研究者番号：50280988

(2) 研究分担者

吉村 洋子 (YOSHIMURA YOKO)
公立大学法人福井県立大学・
看護福祉学部・教授
研究者番号：70100625

寺島 喜代子 (TRASHIMA KIYOKO)
公立大学法人福井県立大学・
看護福祉学部・准教授
研究者番号：20180078

笠井 恭子 (KASAI KYOKO)
公立大学法人福井県立大学・
看護福祉学部・講師
研究者番号：40249173

(3) 連携研究者

なし